



FSCだより

北里大学獣医学部 附属フィールドサイエンスセンター

第 65 号 2017.5.29

FSCの設立趣旨

土地、植物、動物及びそれらを取り巻く環境を生命系として教育・研究を行うとともに、これらの研究成果を通して、広く地域社会の発展に寄与することを目的とする。

十和田農場から

二色の双子

3月に入り今年も羊の出産のシーズンが始まりました。

今年は、全部で7頭の羊が出産する予定です。出産第一号の子羊は、サフォーク種の母親とマンクスロフトンの父親から生まれた雌羊に、もう一度マンクスロフトンの雄を交配させた羊です。この出産第一号の子羊は、珍しいことに白色の子と茶色の子の双子でした。昨年と同じ組み合わせで交配して出産したのですが、その子羊はマンクスロフトンと同じ色の茶色の子羊でしたので、当然今回も茶色の子羊が生まれるものと思っていたら、白と茶色の二色の双子が生まれておどろいています。

見学に来る先生や学生は、なぜこのような双子が生まれてきたのかと興味津々です。それでも可愛い子羊には変わりはありません、みんなに可愛がってもらっています。

さて十和田農場では、この先この2頭をどのように育てていこうかと思案中です。機会があったらこの続編を、FSC便りで報告させていただきます。



八雲牧場から

牛生態汚染防止に向けた講習会への参加

去る1月18日北海道畜産公社主催による牛生体汚染防止に向けた講習会が北海道畜産公社函館工場会議室にて行われ、牧場からは小野が参加しました。

講習会では、平成8年に大阪堺市でおきたカイワレ大根によるO-157食中毒が説明され、当時小学校1年生だった被害女性(25歳)が平成27年10月に、その後遺症が原因で死亡したことが説明され、食中毒がその時限りではなく、場合によっては20年近く経過した後に死亡することがあることに驚きました。

また、牛のO-157保菌状況を農場調査で行ったところ、農場別では3割近くの農場が保有しており、更に個体別では1割弱の家畜が保有しているとのことでした。これらの危害を避けるために、フードチェーン(加工・流通・販売までの一連の段階)からリスクを下げられる行程を考えた場合、現状ではと畜場における検査時と消費過程における加熱でしかなく、更にこのリスクを下げるためには農場からの出荷時に清潔で健康な家畜を搬入するしかないとのことでした。さらに、公社側では体表に糞便が多量に付着した家畜は、胸部から腹部にナイフを入れるため、いくら衛生面に注意しても被皮を持った時点で糞便から埃が飛散して衛生的な作業ができず、また糞便を切ったナイフは切れ味を失い職員がけがをすることがあるとの説明がされ、生産者としての責任として体表を清潔に管理した家畜を出荷することが大切だと強く感じました。

バイオ・マーケット総会への参加

去る2月3日に、八雲牧場の有機畜産物(牛肉)を取り扱っている(株)バイオ・マーケットの総会が京都市で行われました。

総会前には有機畜産物についての職員勉強会が行われ小野が、八雲牧場における有機畜産物についてのプレゼンテーションを行いました。

バイオ・マーケットの職員向け勉強会においては、現在畜産物の売り上げが落ちてきているため取扱商品についての知識を高めるために行われたとのことでした。

大野ファーム、北里大学、内外食品(ブロイラー)、ベッカーレーンオーガニック農場(アメリカオーガニックポーク)が説明を行ない、準備当初はバイオ職員がどの程度の話を要求しているのかがよくわかりませんでした。話をしている時の反応やその後の個々で質問に来てくれた様子を見ると、バイオ・マーケット自体は農産物を主に行ってきたため畜産物についての知識が少なく、消費者にどのように説明すればよいのかわからず販売に苦戦しているという様子でした。

今後は、もっと関係を密にし、協力しながら販売していきたいと強く感じました。

第30回 さむいべや祭りへの参加

今年も、昨年同様八雲町パノラマパークで開催されたさむいべやまつりに参加し、北里八雲牛のネギバラ焼きの販売を行いました。昨年と異なり天候に恵まれ売れ行きは好調で、13時頃には完売しました。特に、11:00~13:00の間は常に行列ができており、

調理が間に合わずお客様を待たせることもありました。

今回のさむいべやまつりでもビンゴゲームが開催され、ビンゴゲームの1位の景品として15,000円分の北里八雲牛を実行委員会で用意して下さったため、その景品の説明としてステージ上で北里八雲牛の紹介を行う機会を頂き、佐藤職員が説明いたしました。

例年参加させて頂いていることで八雲町内での認知度が徐々に高まっていることを実感できている中、このような機会を頂けることでますます認知度が高まっていくのではないかと期待したいところです。



阿蘇のあか牛・草原牛プロジェクト実施草地の見学および九州沖縄地域における放牧・粗飼料による赤身牛肉生産振興に関する情報交換会への参加

橋村氏を代表とする「(社)阿蘇のあか牛・草原牛プロジェクト(熊本県熊本市)」では、毎年費用の掛かる野焼きを行うくらいであれば牛を放牧して阿蘇の環境を守り、さらに地元で生産されたあか牛(褐毛和種)を作っていききたいとの思いからこのプロジェクトを立ち上げているとのことでした。

現在利用を考えている牧野組合では、理解を得て175haの草地が確保できており、これを利用してどのように放牧管理を行い、また越冬用の飼料を確保していくかということが相談されました。

基本的には八雲牧場と同様の管理を行いたいという思いがあり、化学肥料や除草剤の投入は極力控えたいということです。

阿蘇の牧野利用には、難しい課題が多くあると思われたが九州の気候に応じた北里方式を実践することができればとても意義があることと感じました。いずれ北里小国牛のような発展につながることを期待したいと思います。

(編集担当：畔柳 正)